



チャンス

国家公務員共済組合連合会 新別府病院 津 村 佳 希

この文章の執筆を依頼された時、これはチャンスだ、と思いました。

なぜなら今これを読んでくださっている皆様は、大分の医療動向の決定権を持っている方から それを縁の下で支えている方まで幅広い方々であると思ったからです。鶴の一声、という言葉が あります。決定権のある方がGOサインを出せばどんな物事も動き出す、という意味です。 単刀直入にこの文章の趣旨を申し上げますと、ぜひ、各地域、各医療機関、各行政の"鶴の一声" を連鎖させて大分県の医療のDX化を進めたい。これがこの文章でお伝えしたいことです。DX化 (デジタルトランスフォーメーション化)とは、デジタルテクノロジーを駆使して、物事のプロセス を再構築することをさします。

私が研修医として三次救急病院で働く中で一番の衝撃だったのが、救急隊からの事前の情報 伝達手段が電話のみ、ということでした。バイタルサインを救急車内から電話で伝える、主訴も 既往歴も電話で。救急隊によっては伝える情報と順番に若干の差がある。電話が聞き取りにくいのは もちろん結局搬送されてくるまでどんな患者がくるのかはっきりしないこともままありました。 救急隊から電話がかかってきてもその時のマンパワー等で受け入れを断らざるを得ない事も ありました。まさか令和の時代にそんなはずはない、と他県の救急搬送のDX化の例を調べたら ありました。奈良県です。奈良県は既に全ての救急隊と救急医療機関でのDX化を実現していました。 具体的にはe-MATCH®というシステムを導入し、iPadを用いてクラウドを介した双方向型の伝達を 行い、導入から半年で現着から搬送までの大幅な時間短縮を実現していました。

もっと身近な話題ですと、コロナの発生届が例にあがります。まず医師が書類を作成して、次に保健所にFAXで送り、それを1つ1つ保健所職員が手打ち入力します。もしこれが、DXを用いて医師が発生届を入力する段階で最後まで全自動で出来るならどうでしょうか?手打ちミスも無くせて時間と労力も軽減できませんか?そしてなによりDX化は医療従事者の負担を減らすだけでなく患者のためになります。わかってる、わかってるんだけどなあーいろいろなーうーん、、、とDX化を先延ばした結果、今の医療システムの根本は昭和でストップしています。ここでひとつ注意したいのは、昭和があったからこそ今があるということです。限られた技術、資源で今日までの医療を支えてきてくださった先人の血と汗と努力の結晶に我々が生かされていることを忘れてはいけません。しかしだからといってこのまま電話やFAXだけを使い続ければいいというわけにもいきません。

ではどうすればいいか、答えは非常にシンプルです。私のような若手がいくら単独で動いても限界があります。ですから今これを読んでくださっている皆様のアクションが必要なのです。なにか自分の経験や知識で協力できるとなったらお気軽に私までご連絡ください。立場に関係なく。私が皆様の仲介人となります。何をするかは連絡を取った後で一緒に話し合って固めましょう。鉄は熱いうちに打つものです。何がきっかけで物事が進むかなんて誰も予想できません。たくさんの大人のアイデアと力で物事は絶対動くと信じています。私は今e-MATCH®を開発したバーズ・ビュー株式会社の夏井社長に連絡して大分県でのe-MATCH®実装に向けてオンライン会議を進めています。このコラムが私の意見を書いた第一号ですが、もしほかに発信できる場をご提供いただけましたら是非よろしくお願いいたします。

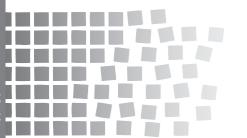
わたしの座右の銘は、為せば成る、です。

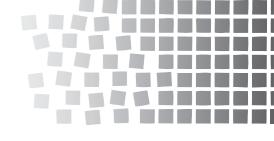
連絡先 tsumu909@oita-u.ac.jp

ご連絡頂ける場合は、ご所属とお名前をご記載ください

※執筆者のご希望により連絡先を掲載しております









大分大学医学部附属病院

佐 藤 雄 高

余寒の候、諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

私は、大分大学医学部附属病院 研修医1年目の佐藤雄高と申します。この記事をご拝読頂く頃には第116回医師国家試験も終わり、まだ間もない頃と存じます。昨年、自分が受験した時の事がつい先日のようで、それほどこの1年間の研修生活は充実していたように思います。

まずは、この場をお借りして自己紹介をさせて頂きます。私は大分県由布市の出身で、開業医である 父の姿を見て育ちました。高校は大分東明高校に進学し、大学は岡山県の川崎医科大学に縁があり、 そこで6年間学び、昨年晴れて医師となる事ができました。自大学に残るという選択肢もありましたが、 ゆくゆくは父親の後を継ぎ、大分県の地域医療を支えたいという思いから、研修は大分県で行う事に 決めました。大学病院を選んだきっかけとしては、まずは自分という存在を知って頂き、先生方との 繋がりを広げていく上で最適だと考えたからです。

他大学出身という事もあり、4月に勤務が始まった際は知り合いが1人もおらず、不安はありました。 しかし、卒後臨床研修センターには何でも相談できる先生が傍に居て下さり、同期や2年目の先生方 にも恵まれ、すぐに打ち解ける事ができました。また、各診療科の先生方にも親身に分け隔てなく 御指導頂き、1人の医師として業務に携わっている実感を得ております。

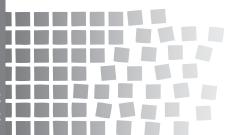
研修生活を通して、学生の頃は学べなかった数多くの経験をさせて頂きました。国試的な知識が 実際に臨床の場で生きている場面に遭遇すると、より知識が定着し、更に踏み込んだ知識を得たい という意欲につながります。また、患者さんの生活背景や社会的背景、性格なども考慮し、処方や 治療方針を検討するなど、臨床でしか学べないこともあります。

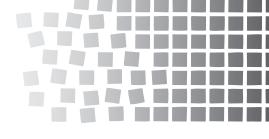
臨床実習で回ってくる学生さんも自分にとってはいい刺激になります。大分大学の学生さんは 学ぼうという姿勢が強く、受け身だった自分の実習態度とは大きく違いました。彼らのふとした 質問には感心させられる事や学ぶ事が多々あります。先生方と学生との距離感が近いのも非常に 良い点だと感じました。

手技についても,成否で一喜一憂するなどまだまだ未熟ではありますが,試行を重ね,少しずつ 上達しているのを感じております。

この一年間で確実に成長していると実感しておりますが、実際に生命の危機にある患者さんを 目前にした際、今の自分に救う事ができるかと問われると、救う事が出来ないのではという恐怖心は、 正直払拭することが出来ません。その恐怖心こそが今の自分を成長させる原動力になると信じて、 今は日々の研修生活を全力で過ごしたいと思っております。

最後になりましたが、支えてくださる全ての方々に感謝し、諸先生方のご活躍を祈願して、 研修医1年目の近況報告とさせて頂きます。ご精読ありがとうございました。







2021年の研修生活を振り返って

大分大学医学部附属病院

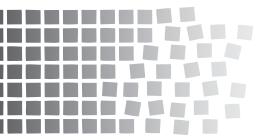
髙 橋 宏 太

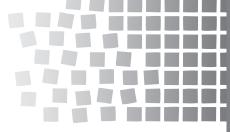
新年、あけましておめでとうございます。謹んで新春の祝詞を申し上げます。先生方におかれましては、輝かしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

私, 髙橋宏太は大分大学医学部医学科に再受験で入学, 昨年春卒業し, 引き続き地元大分で働いております。季節の流れは早いもので, つい先日研修医として働き始めた私が間もなく2年目の年を迎えようとしていることに驚くばかりです。まだまだ未熟な自分や, 医師として働く将来像に日々頭を悩ませながらも, 大分大学の先生方の温かいご指導や, ともに励ましあい高めあうことのできる同期たちのもと, 日々研修に励んでおります。第115回医師国家試験に受かることに只管に必死であった昨年を思えば, ほんの僅かでも先生方や患者様のお力になったり, 医師としての様々な形での成長をしていけたりできることはまさしく喜びそのものであり, 今後とも精進していきたいと願うばかりです。

2021年の8ヶ月間、研修医として働いていく中で、時には長年苦しんでる病気や怪我が快方に向かい、患者様が健康になっていく姿に喜びを感じることもあれば、厳しい場面に遭遇することも経験しました。初めのうちは自分では到底患者様や先生方のお力にはなれないと尻込みし、「何故あの時失敗することを恐れて動けなかったんだろう」と帰宅後に自問自答する事ばかりでした。今でもまだ未熟な自分は時にはそういう思いに沈み込むことはありますが、少しずつ今の自分に出来ることを率先して実践できるようにはなってきていると思います。病名や病状に関わらず、どの患者様にもそれぞれの人生があり、それを私たち医療者は深く尊重する必要があると、この8ヶ月間で学びました。この先医師として成長していく中でも、本日感じているこの教訓は胸の内に残しておこうと固く誓っております。まだまだ慣れない業務も多く、知識の面でも体力の面でも不安は尽きませんが、それでも一歩踏み出し、挑戦し経験する事こそが成長への近道であると感じております。これから何十年と医師として過ごしていく中で、挫折も喜びも数多く経験すると思われますが、それらすべてを自らの医師として、そして人としての清澄に繋げられるよう日々精進してまいります。

以上をもちまして、研修医一年目の御挨拶とさせて頂きます。最後になりましたが、この度は 拙文をご精読の程、誠に有難うございました。先生方の新年のさらなるご活躍を心よりお祈り申 し上げます。







研修医1年目の近況報告

大分大学医学部附属病院

福田千瑛

師走の候、諸先生方におかれましては、ますますご清祥のことと心よりお慶び申し上げます。 私は大分大学医学部附属病院で臨床研修をさせて頂いている研修医1年目の福田千瑛と申します。 この場を借りて自己紹介させて頂きます。

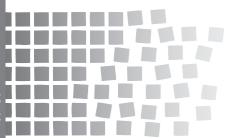
私の両親は大分県出身で、母の里帰り出産のため私自身は日田市で生まれました。その後は関東で育ち、東京学芸大学附属高校を卒業後は、縁あって両親の故郷である大分で学生生活を過ごしました。

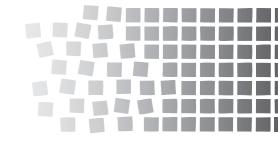
1年前を振り返りますと、ちょうど卒業試験が終わりほっと息をつくのも束の間、国家試験本番に向けて懸命に勉強をしていました。ワクチン接種もまだでしたので、新型コロナウイルス感染症やインフルエンザが怖くて自宅で一人で勉強する日が続きました。卒業試験が終わってからは、祖父母の家に居候させてもらいながら勉強を続けましたが、やはり孤独感や不安感を抱えながらの受験生活でした。それを思い出しますと、1年前と今では生活が大きく変化して、自分が医師として患者さんに接していることが不思議なことのように思えます。

今年の8月と9月に高度救命救急センターで研修をさせて頂いたのですが、そこでとても印象的な患者さんを担当させてもらいました。その患者さんは背景に低栄養があり心肺停止蘇生後、重症肺炎のため集中治療を行いました。担当をさせてもらった当初は、何の治療が行われているのか全く分からず、治療内容を把握するので精一杯でした。しかし、毎日患者さんのバイタルや身体所見、食事摂取量や尿量、それから検査値や画像所見を確認していくうちに、病態の全体像や問題点が少しずつ分かってきて、自分なりにアセスメントできるようになりました。また同時に、自分に足りない知識にも気づき、勉強を頑張らなければという気持ちにもなりました。その患者さんが、笑顔で退院されたときは本当に嬉しかったですし、退院後にお手紙をくださったので、さらに忘れられない経験になりました。毎日患者さんに会いにいってお話を聞き、その日の状態を観察すること、身体所見をとることは大事だということをこの症例から改めて学んだ気がします。

学生の頃は、国家試験を合格した研修医の先生方はなんでもできる存在だと思っていましたが、いざ自分が研修医になってみると何もかもが初めてのことで自分の勉強不足や力不足に歯がゆさを感じる日々です。それでも、医師として患者さんに関わる責任の大きさを噛みしめながら、目の前にあることを一つ一つ頑張ろうと思います。

最後になりましたが、諸先生方の益々のご活躍を祈願して研修医1年目の報告とさせて頂きます。 来年も、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。ご精読ありがとうございました。





研修医の近況報告

大分大学医学部附属病院

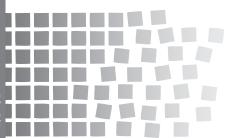
渡邊咲仁

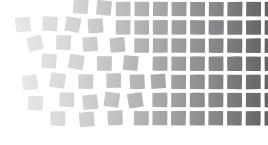
鮮やかな紅葉の候、諸先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。 私は大分大学医学部附属病院研修医1年目の渡邊咲仁と申します。この場を借りてご挨拶させて いただきます。

研修医として、そして社会人として歩み始め、もう半年が経過し、季節の流れの早さに驚かされます。私は徳島大学を卒業し、地元大分に戻って参りました。大分大学のことをよく知らないため不安もありましたが、親身になって様々なことを教えて下さる優しい先生方や支え合える同期の仲間に恵まれ、充実した研修生活を送っています。昨年は病院実習がすべてリモートとなり、自習室も使えないという環境で孤独感と受験勉強のプレッシャーに堪えた1年でしたが、今は医療スタッフとはもちろん、患者さんとも様々なコミュニケーションが取れることに感謝し、幸せを感じています。今の積み重ねが未来につながると思うと、毎日経験していくことに無駄なことなど一つもないのだろうと実感させられます。これからの医師としての基礎を身につける初期研修も頑張りたいと身が引き締まる思いです。

研修が始まり、慣れない業務を覚えるのにも一苦労で、やっと慣れてきた頃に次の診療科へローテートし、一から仕事を覚えていくため、体力的にも勉強まで辿り着けない日もあります。しかし、現場で毎日新しいことを学べて、出来ることが増えてきており、わずかながらも成長できている自分を実感しています。学生時代にわからなかった医学的な内容も、実際に病棟で患者さんの治療に担当医の一人として携わることでさらに詳しく学びたいと思うようになり、また、どんな人も様々な悩みや思いを抱えながら過ごしていることを実感するようになりました。薬では治らない患者さんの苦痛に対してもしっかり向き合い、全人的に診ることができるのが一人前の医師なのだろうと思います。患者さんの思いに寄り添い、改善に向けて共に歩んでいけるような医師になれるよう努力していきたいです。

最後になりましたが、支えて下さる全ての方々に感謝し、また諸先生方の益々のご活躍を祈願して、 研修医1年目の近況報告とさせて頂きます。ご精読ありがとうございました。







研修医1年目の近況報告

大分大学医学部附属病院

漆 畑 博太郎

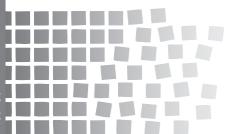
諸先生方は益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

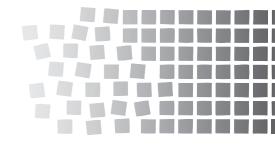
私は大分大学医学部附属病院で臨床研修させて頂いている研修医の漆畑博太郎と申します。 静岡県出身で、他大学を卒業後、学士編入で大分大学医学部に入学しました。学生時代は基礎系の 研究室で実験に勤しみ、ゼブラフィッシュという小型の実験魚のゲノム編集から、神経変性疾患の 病態形成機構の解析を行っていました。ゼブラフィッシュは、体外発生で胚が透明であり、発生 初期から神経発生が観察しやすいため、致死性の神経疾患の解析に向いた実験動物です。実験を 通して、事象の核心に迫る面白さに心を奪われる毎日を過ごしました。大学卒業後は臨床と 基礎研究の両方を学びたいと考えていたところ、ちょうど研修医が博士課程に進学できる制度 であるORPhDプログラムが始まり、そのまま大分大学医学部附属病院で研修させていただいて おります。

ORPhDプログラムは、初期臨床研修中に大学院に進学できる制度で、臨床研修に合わせた実験プラン・スケジュールを組み、初期研修と大学院生の"二刀流"を実現できるコースです。最初は、「本当に臨床と基礎研究が両立できるのか?」と大きな不安がありましたが、充実した日々を送りつつ、大好きな研究も行え、早いことに4か月が過ぎてしまいました。4月、5月は分からないことの連続で、患者さんに会いに行くことすら緊張していました。自分なりにカルテを見て準備したつもりでも、予想外の質問が来てしまい、焦ってしまうこともありました。しかし、分からないことや出来ないことがある度に、上級医の先生方や、2年目の研修医の先生方がとても優しく教えてくださり、少しずつですが成長できていると実感しています。また、不安なことの一つに手技があったのですが、積極的に練習する機会を与えてくださり、その点も大変感謝しております。

まだ研修は始まったばかりですが、今後もいろいろな科をローテーションし、様々な角度から疾患について理解できればと考えています。また、臨床で学んだことを基礎研究と関連させ、自分なりの考えを持ちたいと意識しています。同じ疾患でも患者さんによって悩みは違い、それぞれの科の先生方の治療に対する考え方も違います。臨床現場で様々なニーズがあり、そこから治療に向けた基礎研究が始まり、最終的には臨床現場に還元されます。実際の臨床を理解せずに、意味のある研究はできないと思います。まだ、研修医としてできることは限られていますが、研修中の今しか経験できないチャンスでもありますので、様々な患者さんと向き合い、一つでも多くのことを学び、臨床も基礎研究も包括的に考えられるような医師になりたいです。

最後になりましたが、諸先生方の益々のご活躍を祈願して、研修医1年目の近況報告とさせていただきます。ご精読ありがとうございました。





研修医1年目の近況報告

大分大学医学部附属病院

石 田 達 也

諸先生方におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

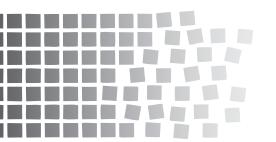
私は大分大学附属病院・研修医1年目の石田達也と申します。この場を借りて自己紹介させていただきます。

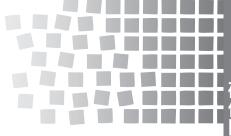
私は大分市内に生まれ、小学校は宇佐市で過ごしました。中学、高校は北九州の明治学園へ進学し、福岡大学で学び、2021年に晴れて医師となり大分に帰郷しました。人生の半分以上を福岡で過ごしたため初期研修は福岡で行うことも考えましたが、これからの人生を考えたとき自分を育んでくれた大分県に貢献したいと思い、大分大学を研修の場として選ばせていただきました。さて、研修医としての生活が始まり4か月が経過しようとしています。私は現在まで内分泌内科、膠原病内科、小児科、精神科で研修させていただきました。正直なところ医学的な勉強をする余裕があまりなく、カルテの使い方や病棟業務に慣れるので精一杯です。ですが上級医の先生方や周囲のスタッフの方々から厳しくも優しくご指導していただき、日々できることが増えていると

祖父に以前「注射は上手くなりなさい。どれだけ知識があって人柄がよくても注射が下手だとすぐにやぶ医者と言われる」と言われました。そのため研修先を選択する際に、一般的に市中病院より手技や経験症例が少ないといわれている大学病院での研修には不安と迷いがありました。しかし裏を返せばそれは一つ一つの手技や症例に時間をかけて考察できるということでもあり、与えられた機会で、いかにきちんと準備して確実に遂行できるか、自分の生涯的な能力として習得できるかを追求できることが、大学病院で研修することの強みでもあり、良さであると思います。これからも目の前の患者さん一人一人に対してしっかり向き合っていき、一人前の臨床医を目指して精進していこうと思います。

最後になりましたがこれまで支えてくれた全ての方々に感謝をしつつ、諸先生方の益々のご活躍を 祈願して、研修医1年目の近況報告とさせていただきます。ご精読ありがとうございました。

実感しています。







研修医生活を振り返って

大分大学医学部附属病院

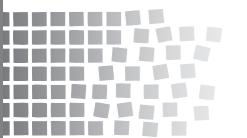
後 藤 亮

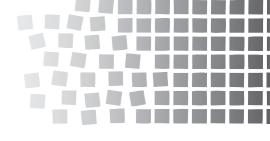
新型コロナウイルスの拡大で、診療や業務に多大な影響が出ている中、先生方におかれましては、温かく研修医をご指導いただき、深く感謝を申し上げます。私は大分県地域枠医師として、1年目は大分県厚生連鶴見病院で研修し、現在大分大学医学部附属病院で2年目の研修を行っております。研修病院として鶴見病院を選択したのは、Common diseaseを多く経験したかったことや、病院の研修プログラム、内視鏡を多く経験できることに魅力を感じたからですが、この1年で本当に様々な疾患を経験することができました。大学病院では、専門的治療や重症患者の病棟管理など市中病院では経験できない研修ができ、非常に充実した研修を行っています。

研修医生活の始まりはわからないことだらけの連続で、カルテの書き方や検査のオーダー、 入院時指示など「基礎の基礎」から多くの人の力を借りなければ何もできませんでした。手技に 関しても全て手取り足取り教えていただく毎日ですが、一つ一つできることが増えていくたびに 成長を実感しながら研修を行っています。

また沢山のメディカルスタッフとともに、実際に患者さんに診察や処置を行うようになり、自分一人で勉強していた学生時代と異なり、世界が大きく開いてきたことを実感するとともに責任の重大さも感じています。自分の未熟さにもどかしさを感じる場面も多く、経験が少ないため治療の先がなかなか見通せない中で、上級医の先生と治療方針について何度もディスカッションしたり、他科の先生にコンサルトを行ったり、家族と話し合ったりと自分なりにできる最大限のことを行っています。しかし最終的には亡くなってしまう患者さんもいました。その度にもっと自分にできたことがなかったかを考えながら、少しでも次の症例に活かせるように努力しています。

ローテーションで研修した科は今まで知らなかった世界を開いていくようで、どの科も魅力的で楽しい研修を送らせていただいています。3年目以降の専門科を選択しないといけない研修医2年目の今、その選択に非常に悩ましく思っています。大分県の今後の医療を担っていくという責任を感じつつ、最後に納得の行く結論を出せるように今日も全力で研修を行っております。







研修医2年目の近況報告

大分大学医学部附属病院

後 藤 峻 大

盛夏の候、諸先生方におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。 ご紹介に預かりまして7月の研修医コーナーを担当させてもらうことになりました。

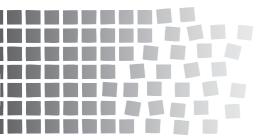
まずは自己紹介させていただきます。大分大学医学部附属病院で研修をさせて頂いている 後藤峻大と申します。今回は私自身のこれまでと研修医生活について書かせてもらおうと思います。

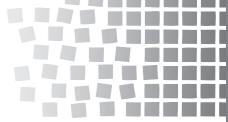
私が医師を志したのは、幼稚園の頃でした。マイコプラズマ肺炎に罹患し、大分こども病院に入院していた時によくしていただいた先生の姿に憧れ、幼いながらに医師を志すようになりました。その想いをもって岩田中学・高校に進学し、1年間の浪人生活を持って2013年大分大学医学部に37期生として入学することができました。正直最初に医師になりたいと思ってから長い時間が経っておりました。ようやく医学部に入れたという達成感とともに、ここからが始まりだと気張る思いもありました。ただ大学に入学してからも実際の医療に自分が直面するまでにはここからまだ6年間という長い年月がありました。数々の試験を乗り越え、ポリクリで1年間各科の先生方の仕事をみて、そして医師国家試験を終えて、ついに自分が目指していた仕事が目の前になりました。

自分は将来内科系を考えており、救急などの瞬時の判断を迫られる環境が苦手であったため、1年目の研修は忙しいと噂に聞いたアルメイダ病院を選択しました。この1年間の経験は自分にとってとても貴重なものとなりました。自分が目指していた世界でついに働くことになったのですが、毎日が勉強の連続でした。実際の担当患者さんの治療方針を先生と考え、熱発や浮腫などその日に起きる問題に分からないながらも奮闘する日々でした。辛いこともありましたが、嬉しい事もたくさんありました。1番嬉しかったことは患者さんの感謝の言葉でした。その言葉を聴いて人に感謝されることの喜び、もっと勉学に励み患者さんの力になりたいという強い気持ちが湧いてきました。次に実際に働いて感じたこととして、他の医療従事者の方々のサポートの大きさでした。1年目ということもあり、わからないことが多かった自分は看護師、薬剤師、臨床工学など多くのコメディカルの方々に助言を求め、問題を解決していきました。将来的にチーム医療を最大限活かせるような医師になりたいと思いました。

そして何より1番良かった点が、自分がこうなりたいと思える上級医との出会いでした。医療への姿勢、患者さんとの向き合い方、常に向上心を持って戦いを挑むその姿を見て、自分もその先生に少しでも近づけるように頑張りたいと強く思いました。現在研修医2年目、これまでの想いを胸に患者さんのために日々精進し、医の道を邁進しております。

最後になりますが、拙い文章にも関わらずご精読ありがとうございました。諸先生方の益々の ご活躍を祈願して、7月の研修医コーナーを終わりと致します。







研修2年目の活動報告

大分大学医学部附属病院

平 國 由 佳

諸先生方には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

私は大分大学医学部附属病院で臨床研修させて頂いている研修医の平國由佳と申します。研修医生活もあっという間に1年が経過し、2年目となった今、後輩ができたのを不思議な気持ちで見ています。

「お前は既に医者なんだから、主体性を持って患者さんに何ができるか考えろ。」

4月にどこか学生気分の抜けない自分に頂いた指導医の言葉。当時は「無理言うな」と半べそをかいてしまったこの言葉も、何をするにも患者さんや指導医、コメディカルに迷惑をかけるんじゃないかと踏み出せなかった自分への励ましだったと今は思っています。新たな研修医達が様々な思いをしている今日この頃、同じ研修医の立場なりに背中を押せたらいいなぁと考えています。

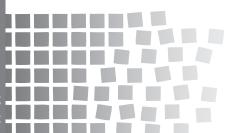
去年度は自分の出身である中津市にある中津市民病院で研修をさせていただきました。出身地で、しかも自分自身もお世話になった病院で働けるという事は、嬉しいような誇らしいような、どこかこそばゆい気持ちで初日に白衣に袖を通したことを今も覚えています。医師数は研修医をあわせても60人前後と少ないながらも北部医療圏の診療を背負っている地域の中核病院でした。県境ということもあり様々な県の医局から派遣されているこの病院は科の垣根はもちろん他大学の医局もまじりあって診療していることが特徴でした。人数が少ないというのはデメリットばかりではなく研修医として前線に立たせて頂ける機会も多く、最初はおっかなびっくりやっていた問診や手技も徐々に慣れて、わずかではありますが臨床医として一歩踏み出すことができたのではないかと考えております。また、コメディカルの方々とも距離も近く、より多面的に患者さんについて知ることができ、やはり医療というのは様々な職種の方々との連携がなければ成り立たないのだと思わされる場面も多々経験させて頂きました。

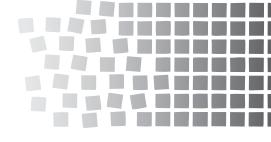
現在は出身大学の大分大学で2年目の臨床研修をしています。

2年目となりましたが、ベッドサイドに行くのは未だに緊張します。患者さんに突如ぶつけられる質問の数々(いつ帰れるの、どうしてこの検査をするの、etc…)、偶然居合わせた看護師さんからの大切な報告などイベントが起こりやすいベッドサイド。その結果やろうとしていた問診や診察を忘れて戻ったことも一度や二度ではありません。最近はカルテをびっちり予習していくおかげかなんとか言葉を返すことができていますが、心の中では冷汗を沢山かいています。慣れる日はくるのでしょうか。

しかしながら、自分の希望した診療科をローテーションさせていただくのは大変ありがたい機会であり、毎日身が引き締まる思いです。この先も自分の思うようにいかず悩む日もあると 思いますが常に前へ前へと前進する気持ちを忘れずに日々を過ごしていきたいと思います。

最後になりましたが諸先生方の益々のご活躍を祈願して研修医2年目の報告とさせて頂きます。







研修医2年目の近況報告

大分大学医学部附属病院

園 田 雄 斗

諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

私は大分大学医学部附属病院の研修医2年目の園田雄斗と申します。この場を借りて自己紹介を させて頂きます。

私は小学校から賀来に住んでおり、高校大学も大分でしたので、ずっと大学病院の麓に住んでいます。ですので、上の先生方と昔あったお店などの話が出来たりします(笑)。そんな風に大学病院がずっと近くにあったためか、研修先も大分だな、という風に考えておりました。

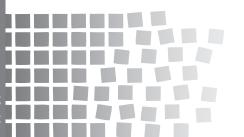
研修医になってから右も左も分からないまま、良く言えばがむしゃらに、悪く言えば頭を使わずに 研修していたため、たくさんの壁にぶつかりました。後々振り返ると、もっと事前に手技の勉強を しておけばよかった、もっと上級医にこまめに相談しておけばよかったなと思うことだらけです。 もちろん、後悔だけでなく医療者としての喜びを体験できたこともありますが、自分の未熟さを 痛感する日々の方が多いです。その中から1つだけ話をさせていただきます。

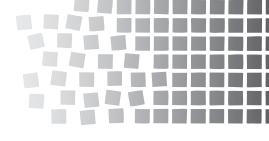
先ほど申し上げた様に、ずっと大分でしたので高校の友人が研修先の診療科にいました。私が研修医1年目で、彼は研修を終えたばかりの医師3年目でした。しかし、彼と私では、経験の差だけでは言い尽くせないほど病気や治療に対しての理解度が違いました。時間の差は、たった2年間なのに医者として、人間としての密度が非常に濃くなっていました。もちろんそれまでの診療科の中でも、できる若手医師はたくさんいらっしゃいました。ただ、高校からの友人の彼が変わったことに非常に驚くと同時に、私自身が研修を終えたときに、こんな風な医者になれる気がせず、ショックを受けました。そんな時に、彼からある一言を言われました。「園田、カルテを書くのも大事やけどもっと上の先生に病気や治療のこととか教科書に載ってないことを質問せんと、もったいないよ。」更にへこみました。自分としては、100%のつもりでしたが、周りから見るとまだ足りてないのだ、と初めて気づきました。彼からは病気の知識や治療の上で起きる副作用、合併症、手技のコツなど本当にたくさんのことを教わりました。よく子供の頃に、こういう大人になりたいと感じたかと思います。研修医の頃にはこんな医者になりたいと考えたかと思います。そんな理想の医師像の1つに高校時代からの友人がなるとは思ってもみませんでした。

幸いなことに、研修医としてまだ1年あります。様々な診療科で研修させていただく機会がたくさん残っており、多くの体験、経験を積む機会があります。その間に自分のなりたい医師像は変わるかもしれません。しかし、根っこには彼がいると思います。

最後になりましたが、諸先生方の益々のご活躍を祈願して、研修医2年目の近況報告とさせていただきます。

ご精読ありがとうございました。







研修医2年目 初志

大分大学医学部附属病院

伊 南 利 菜

コロナ禍の最中, 諸先生方ならびにすべての医療スタッフの皆様におかれましては厳しい 現状にもかかわらず, 医療を続けてくださっていること, 心より厚く御礼申し上げます。

改めまして,大分大学医学部附属病院の研修医の伊南利菜と申します。

世の人々が思う「研修医」とはどういうイメージでしょうか。

「練習台にされたくない」「経験が浅いのに当直で最初に呼ばれて大変そう」「勉強が大変」etc… (※あくまで個人の感想です)

たしかに、日々進歩する医学を習得するべく勉強の毎日です。COVID-19のような新たな 分野にも対応していかなければいけません。上級医の先生方には、日ごろの業務と並行で私たち 研修医の指導を行ってくださり誠にありがとうございます。

学生のときの座学と大きく異なるのは、担当している患者さんとの結びつきが深くなる分、自然と勉学に力が入り、さらに看護師さん、SWさん、リハさん、栄養士さん…挙げるときりがないですが、多くのスタッフさんが、各々の専門的な見地から、ひとりひとりの患者さんとそのご家族さんを支えている姿を間近で拝見し、病気だけではなく病気の「人」を診る/看るとはこういうことなんだと実感し、学生のとき以上の医学の奥深さにふれることができ充実した日々を送れています。私自身、スタッフの皆様から多くの情報を教えていただき、日々支えていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

2025年・2035年問題など今後の我が国の社会情勢を考慮すると多職種での連携は必要不可欠となってきます。学生の頃、医師としてこの多職種連携の中心としてまとめなければならない、そのためにいろいろ学ばなければと思っていました。もちろんそういった責任感も大切ですが、実際に医師(のたまご)になった今、たった一年間ではありますが、いろいろな患者さんの医療に携わる機会をいただいた中で、この多職種連携の要は患者さん・ご家族さんあってこそ、と実感いたしました。

今後もいろいろな科・病院で前期・後期研修を積んでまいりますので、諸先生方ならびにスタッフの皆様にはそれぞれの視点からご教授いただければ幸甚です。また、上記のようなイメージや「こういう医者になってほしくないorなってほしい」など忌憚なくご意見いただければと思います。机上のみの勉学で終わらせないように、皆様のご指導を日々の診療に活かし、ひとりひとりの患者さんに寄り添ってまいります。

最後になりましたが、すべての医療従事者の皆様および県民の皆様のご健勝とご多幸を心より 祈念しております。御精読ありがとうございました。